

## 教員採用試験の合否に影響を及ぼす 諸要因に関する研究

—— 比治山大学教職指導センターのサポート業務と受験生の対人的環境について ——

### **A Study on Factors Affecting the Results of the Employment Examination for New Teachers**

—— The Supporting Service of the Teacher Education Support Center of Hijiya University and  
the Interpersonal Environment of Students Preparing for the Employment Examination ——

溝部ちづ子・石井 眞治・財津 伸子・斉藤 正信・古谷嘉一郎  
Chizuko MIZOBE, Shinji ISHII, Nobuko ZAITSU,  
Masanobu SAITO and Kaichiro FURUTANI

The aim of the Teacher Education Support Center of Hijiya University, which was established in 2007, is to help students who are eager to be school teachers after their graduation. Three years later, in 2010, the Department of Child Development, whose main mission is teacher training, was founded. From that time, Hijiya University students first enrolled started to study in the course for children's school education. In 2011, they started to adopt a serious stance towards school education. Given that situation, since 2011, the Center has focused on teaching and coaching students toward the employment examination for new teachers, such as instruction for the first-stage examination, the essay examination, the interview, group working, planning the teaching procedures, micro-teaching, etc.

This present study outlines the Center's accomplishments from its foundation and the results of the assessment which were gleaned from a questionnaire given to the first-time students who took the employment examination. The assessment is based on the following points: what was the most effective interpersonal environment for them, and how successful were they on the employment examination. The results show that many of the students have much smaller human networks and they have not developed effective skills enough within the interpersonal environment, and that is why they are forced to prepare for the examination individually. Based on the results, the Teacher Education Support Center proposed some ideas to conduct prospective lessons for teacher training.

## 1 背景と問題

私立大学の多くの場合にみられるいわゆる開放性の教員養成の歴史は、いま厳しい見直しの時期に差し掛かっている。安易な教員免許状の発行はもはや認められなくなり、教育現場の現実的要請に十分対応しきれないレベルの課程は認定そのものが取り消されかねないという状況でもある。

一方では、現職教諭の大量退職、大量採用の時代を迎え、教育実践力を備えた若手教員の採用が喫緊の課題と言える。こうした中で、学生の学習面での努力不足、経験不足、資質の問題等から、大学の教職指導体制は、各地の私立大学において教職指導の在り方が大きく問い直されようとしている。教職関連の授業改善だけでなく、大学教育全般において、教育現場の諸要請にこたえうる実践力、専門性、意欲、教師の資質等の育成が一層求められている。

そうした中で、比治山大学においては、教職指導センターが、2007(平成19)年4月に設立された。業務として、教職課程の企画運営、調査研究、教育実習の指導、教員免許状取得や教員採用試験の相談、個別指導、課外講座の実施がセンター規定に掲げられた。

また、2011(平成23)年に、大学設置基準が改訂され、大学でも職業指導(キャリアガイダンス)が義務化された。設置基準の規定には、「大学は、当該大学及び学部などの教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。」とあり、教員養成学科(学部)の場合には、教職志望意識を確立させ、適切なキャリアガイダンスを行うことが求められている。

比治山大学において、教職課程のある学科は、中学校と高等学校教員を養成する学科として、言語文化学科、マスコミュニケーション学科、美術科、総合生活デザイン学科があり、また、幼児教育学科では、幼稚園教諭二種免許状取得が可能であった。

しかし、ここまでの期間、中学校・高等学校の教育実習校からは、学生の意欲の欠如やコミュニケーション力の不足、児童生徒理解の欠如など実習生として問題点を指摘されることもあり、教職を目指す学生にとって最も重要な教員採用試験を受験する数は極めて少なかった。受験した場合も、受験への準備も足りず、「記念受験」と称されるものが多く、かろうじて1次試験に合格するも2次試験を突破する学生は皆無という現状であった。

2009(平成21)年度になって、子ども発達教育学科が新設され、小学校教諭免許状と幼稚園教諭一種免許状の取得が可能となったため、2013(平成25)年現在では、教職を目指す学生数は、格段に増加している(〈表1〉教員免許状取得者数)。同時に、一生の仕事として「教師」を志す学生が増え、教員採用試験合格への道が当たり前の就職活動であるという認識ができてきた。

2012(平成24)年度には、子ども発達教育学科の1期生が4年となり、小学校教員採用試験に大学として初めて参入した。今年(2013年)度は、2期生が受験し、小学校教員採用試験受験結果は一定の成果を上げている。そして、そのことが、言語文化学科学生の中学校教員採用試験受験者へも大きな影響を与えている(〈表2〉2012(平成24)年度・2013(平成25)年度教員採用試験結果)。

本論では、教職指導センターの設置から現在までの業務内容や活動状況の概要を背景として報告するとともに、2012(平成24)年度に、初めての受験者を出した子ども発達教育学科1期生の31名に対して実施した質問紙調査から、比治山大学の教職指導の在り方を含め、教職指導センターの今後の教職支援の方向性や学生自身の学びの人的環境づくりについて言及する。

〈表1〉教員免許状取得者数 (人)

免許状の種類	平成24年度	平成25年度(予定)
中学校教諭一種免許状(国語)	3	4
高等学校教諭一種免許状(国語)	3	4
中学校教諭一種免許状(英語)	4	3
高等学校教諭一種免許状(英語)	5	4
高等学校教諭一種免許状(情報)	4	0
幼稚園教諭一種免許状	35	43
小学校教諭一種免許状	49	46
小学校教諭専修免許状		3
幼稚園教諭二種免許状	112	118
中学校教諭二種免許状(家庭)	2	2
栄養教諭二種免許状	19	12
中学校教諭二種免許状(美術)	7	12
合 計	243	251

〈表2〉2012(平成24)年度・2013(平成25)年度教員採用試験結果 (人)

受験地	年度	受験者延人数	2次試験合格延人数
広島県・市	2012(平成24)年度	44	6
	2013(平成25)年度	42	14
広島県・市以外	2012(平成24)年度	50	4
	2013(平成25)年度	44	12

(1)教職指導センター2012(平成24)年度・2013(平成25)年度の取り組みの概要

ア 設置場所

教職指導センターは、2009年4月、子ども発達教育学科新設とともに、新教育棟6号館1階のエントランスホール内、エレベーター前に移転、開室した。学生が気軽に入室しやすいように、ガラス壁で外側から室内が見通せるようになっている。

イ 構成員と職務

センター長として子ども発達教育学科兼任教授1名およびセンター専任教員1名、非常勤客員センター教員2名が常時在室し、学生の指導や支援に当たっている。2名の客員センター教員は、小学校・中学校1名ずつの広島県公立学校校長経験者であり、週3日ずつの勤務であるが、月曜日から金曜日まで、毎日どちらかの教員が在室し、学生がいつでも相談できるような支援体制を組んでいる。

また、教職指導センター運営委員会の構成員として、運営委員には各学科から学科主任を当て、全学的にセンターの運営や人事事項の審議を行い、センター教員として、各学科からの8名の教員が実際の教職指導全般の協議を行っている。

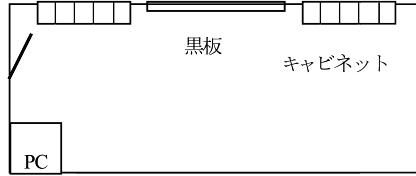
事務担当は、主として学生支援室が行うが、センター内には、1名の非常勤事務が1日4時間の勤務で在センター業務を行っている。

ウ 支援業務について

教職指導センターでは、主として次の業務を行っている。

〈表3〉2012（平成24）年度事業計画案

領域	事業内容	具体的方策
A. 教職免許取得学生数アップ (学力と資質の向上)	1. 教職コースの充実 (ねらい) 教職を目指す学生のリストづくりと個別指導による意識の向上, 情報伝達	① 学年はじめのオリエンテーション時に, 教職を目指す学生のリストを作成する。
		② オリエンテーション時に教職コースについて説明する。
		③ 学科の確認を経て, 教職コースに登録する。
		④ 「教職コースのさまり」を作成配布する。
		⑤ 教職コースの学生は, 教職塾に参加するよう指導する。
		⑥ 教職コースの学生は, 週1回程度, 教職指導センターで客員センター教員の指導を受けるよう指導する。
		⑦ 教職コースの学生は教職指導センターからの情報や指示を受けるよう指導する。
		⑧ 教職コースの学生は教職指導センター主催の講演会, 説明会などに出席するよう指導する。
		⑨ 教職コースの学生に個別相談をするよう指導を行い, 適時的な支援を行う。
		⑩ 比治山「板書」検定を実施する(漢字, 筆順, 記号, 字形など)。
B. 教員採用試験合格率アップ	2. 教職塾の充実 (ねらい) 計画的な学力補充, 学習の仕方指導, 意識向上, 情報伝達	学科との連携
		① 学科からの要望を受けて, 学年別学科別の, 定期的な「教職塾」を計画する。
		② 学科からの要望を受けてどの学科も実施できるよう, 塾の日程を教職指導センターで調整する。
		③ 学科と連携し, 採用試験対策講座を開催する。
		④ 客員センター教員が, 学科と相談し, 学生の実態と教員採用試験の傾向を考慮した上で, 教材を選定する。
		学習内容の充実
	① 模擬テストを行い, 折々に学力の診断を行う。	
	② 小論文指導, 面接指導, 集団討論なども行う。	
	③ 個別の学習計画を指導する。	
	④ 演習授業や, 黒板文字の書き方, 話型, 電話のかけ方, 礼儀作法なども行う。	
	⑤ 教職を取得する為の, 個別相談や個別指導をする。	
	⑥ 学生の要望に応じて, 個別指導をする。	
	3. 「教職課程・学びのガイドブック」改善作成 (ねらい) 学習方法などの指針とする	「教職課程・学びのガイドブック」を作成
		① 2013年度版として改善を図る。
4. 学校支援ボランティア指導 (ねらい) 学校支援ボランティア活動を通して, 教職の実践的な能力を身につけさせる	① 学校支援ボランティア活動を希望する学生に対し, 活動ができるように指導をする。	
	② 広島市教育委員会主催の「学校支援活動参加大学協議会」に出席し, 学生に情報を提供する。	
	③ ボランティア先の学校との連携を図り, 活動のための資料や学生の報告書類を作成する。	
	④ 支援先の学校に対し, 依頼状や礼状を作成する等, 丁寧な連携を行う。	
	⑤ 府中町教育委員会, 坂町教育委員会, 廿日市市教育委員会との協定で, 学校支援活動の充実を図る。	
5. 教育実習・介護実習の事前指導の充実	① 私学協議会会議に参加し, 介護実習事前指導などを充実する。	
	② 私学協議会会議に参加し, 教育実習事前指導などを充実する。	

6. 教職キャリア支援と指導 (ねらい) 新任教師・臨時採用教師・非常勤講師としてのキャリア支援を行う	①	教員採用試験受験指導をする—受験先・受験方法・申込票の書き方など。	
	②	採用決定後のキャリア指導をする。	
	③	臨時採用・非常勤講師採用の具体的な支援と指導をする。	
	④	卒業生の教職キャリア支援をする—採用試験対策継続指導、非常勤・臨時採用の継続支援と指導。	
7. 環境整備 (ねらい) 学習室で自主学習できるように机、椅子類を再配置 学力向上問題や採用試験過去問題などキャビネットに常設し、取り出せるようにする	①	学習室の整備 	
	②	使用上の管理はセンター職員で行う。管理方法の整備。	
8. 組織の充実 (ねらい) ミッション達成に向けて効果を上げるため、広島県のみならず、関東・関西方面の採用試験情報を収集し、受験に対応する	①	教職指導センター組織の変更 客員センター研究員が関東方面等の採用試験情報等を担い、採用試験受験のための学生指導を充実する。	
	②	学科との連携強化。 学科センター教員は、学科の教職コース学生の実態を把握し、ミッション達成に向けて方策を練る。教職指導センターと情報交換・協議する。	
9. 広報整備 (ねらい) 学生への情報周知 学内への広報 保護者、地域、学外への宣伝	①	教職指導センター前掲示の充実。 看板設置。 学習塾の情報、受講状況のお知らせ。	
	②	学生手帳への教職スケジュール記載。	
	③	Hi!wayで「教職コース」学生に向けての情報を発信する。	
	④	教職指導センター発行リーフレット作成・配布（年2回程度）	
10. 事務整理	①	連絡方法（住所録・電話帳）	
	②	効果測定の手式整理（訪問者・相談）	
	③	職員の勤務時間の改善	
	④	報告書の保管	
	⑤	報告方法の整備・文章化	
C. 研究 教職課程調査研究	1. 教職カルテの改善、調査研究	①	ワーキング・グループの設置
		②	現在のカルテの評価・検討
		③	改善（案）の提言
	2. 「教職実践演習」の調査研究	①	研究グループの募集
		②	研究助成金の申請
		③	研究計画（現在のプログラムの評価・検証）
		④	プログラムの作成
	3. 教職課程のあり方の研究	①	学内研究助成金の申請
		②	研究グループの募集
		③	研究計画（質問紙作成）
		④	資料の収集・分析
		⑤	学会発表・論文作成
	4. 学校支援ボランティアの研究	①	研究紀要論文作成
	5. 人材データベース（特別教職コース）	①	ワーキング・グループの設置
		②	卒業生のデータベース作成の入力
		③	保存・利用の検討

## ①教職コースの設置

1年入学時から卒業まで、教職を目指す学生のリストづくりと学生の意識の向上と情報伝達を目的としている。毎年度4月に教職オリエンテーションで説明し、教職コースへの申請を行わせている。教職コースの学生に自覚を促すとともに、学生自身が教員免許状取得までスムーズに取り組めるように支援している。

また、2011（平成23）年度には、比治山大学「教職課程・学びのガイドブック」の企画を行い、2012（平成24）年度からは、教職課程履修学生はすべて必携として、教職キャリア教育のテキストとして、見通しを持った大学生活がおくれるようにした。

教職コースの学生は必要に応じて、随時教職指導センターに来室し、教職相談や学習指導を受け、教育関連図書や新聞・雑誌を読むことができる。

しかし、教職指導センターへ頻繁に訪れる学生は、教職コースの学生の中でも、限られた学科の学生という傾向があり、子ども発達教育学科（小学校教諭免許状取得予定者）、言語文化学科（中・高等学校教諭免許状取得予定者）が、多いという実態である。

## ②教員採用試験に向けてのキャリア支援

ーその1 2012（平成24）年度実施教員採用試験対策講座

〈表4〉は、2012（平成24）年度に実施した教員採用試験対策講座の一覧である。

〈表4〉2012（平成24）年度教員採用試験対策講座一覧

教職指導センター講座	外部講師講座	日程
広島アピール文作成指導		4月～5月
推薦面接指導		4月～5月
特別講師による対策講座		5月
堺市採用試験説明会		5月
	直前対策講座（教職教養・面接）	5/3.4.6
グループワーク講座		6月～7月
グループワーク講座		6月～7月
	結団式	6/20
グループワーク講座		6月～7月
論作文		7月
広島対策（指導案模擬授業面接）		8/1～8/20
東京対策（指導案模擬授業面接）		8/1～8/15
堺対策（指導案模擬授業面接）		8/1～8/7
推薦面接指導		8/1～8/10
	小学校全科対策講座	8月～9月
採用試験面談とアンケート		9/24～10/12
	教職教養対策基礎講座	11月～12月
3年対策塾		2/7～3/19
	小学校全科完成講座	2月
4年授業学級作り講座		2/7～3/8

教員採用試験対策講座を、3年（短大1年）時の教育実習終了後の12月から受験年度の8月まで約9ヵ月間にわたり実施している。内容は、1次試験対策としての、筆答試験指導、小論文試験指導、グループワーク指導、2次試験対策としての面接指導、指導案作成指導、模擬授業指導、集団討論指導に加え、エントリーシートやアピール文の個別添削指導等である。

回数は、外部講師による講座が計28日（一日4単位時間）、教職指導センター教員による学内講座が計54日（一日2単位時間）の合計82日である。学内実施の模擬試験は、年間4回実施している。

受講学生数は、外部講師の講座で、延べ522名、平均19名。教職指導センター教員による学内講座で、延べ859名、平均16名。模擬試験は延べ141名、平均35名だった。

教員採用試験対策講座は、教職指導センターを設置して以降実施しているが、これほどの数の対策講座開講は、2012（平成24）年度と2013（平成25）年度のみである。

2012（平成24）年度実施の教員採用試験で、初めて、2次試験突破の合格者を出すことができたのは、この年度からの取り組みの成果ではあるが、対策講座回数の多さに比して合格という結果に反映されていないという実態も明らかとなった。

### ③教員採用試験に向けてのキャリア支援

#### —その2 2012（平成24）年度教職塾

〈表5〉は、2012（平成24）年度に実施した教職塾に関する表である。

〈表5〉2012（平成24）年度教職塾

	年間参加延べ人数 (人)	年間時間数 (単位時間)	1コマ当たりの 人数(人)
算数・数学	990	115	8.6
国語	1126	207	5.4

1期生の3年生4月から9月まで、教職塾（算数・数学・国語）を開設した。週1回、基礎数学・基礎国語・学習指導要領・指導法・学習指導案作成・模擬授業などを学習内容とした。指導は、2名の客員センター教員が行い、学生の基礎学力向上をねらいとしたものである。

それぞれ秋の教育実習を前に、自己の学力に不安を感じていた時期で、少人数指導を導入したことから仲間意識も芽生え、「学び合い」の土壌が生まれた。また、客員センター教員との人間関係が強くなり、効果的な個別指導や教育相談ができてきた。

しかし、教職指導センターが「教職塾」に取り組む中で、教職を目指す学生の基礎学力が不足している実態が明らかとなっており、改めて大学のリメディアル教育の改善が必要であると感じている。

### ④学校支援ボランティアへの指導

近隣の市町と協定を結び、小学校・中学校において、教職志望学生が学校支援活動を実施することを指導している。活動校の教員の監督の下、学習活動や課外活動に参加し、教育活動を支援することで、教員の日常的な業務を体験することが可能となり、教職への意欲や実践的指導力向上のきっかけとなる。

教職指導センターでは、毎年、前期と後期の初めに説明会を実施し、活動の推進を促している。ボランティア参加の学生数は、2012（平成24）年度で61名、2013（平成25）年度では75名と増加傾向にある。

しかし、一方で、実際の教育現場が抱える様々な教育課題に直面したり、子どもとの実際の触れ合いに困難を感じたりする学生も多く、教職を目指す意欲を失い、教育相談や進路相談を受けるケースも少なくない。

### ⑤教育相談

教職に関するあらゆる教育相談を受け付けている。相談時間は月曜日から金曜日まで、終日である。

具体的には、教育実習事前・事後相談、介護等体験相談、学習相談、教員採用試験受験地相談、教育現場での児童や教師とのかかわり方相談、資質や能力にかかわる相談などである。

相談件数は、平均一日10件程度だが、限られた学生に常態化している実態である。

## (2)2012(平成24)年度・2013(平成25)年度の教員採用試験の合否状況

2012(平成24)年度に、子ども発達教育学科1期生が初めて小学校教員採用試験に臨んだ。31名が受験し、8名が正規教員として教壇に立っている。受験地は、広島県(市)、東京都、堺市、千葉県、横浜市、山口県で、合格者延べ数は10名である。また、正規ではないが、期限付き臨時教員採用試験合格者は、広島県と東京都で10名であった。

2013(平成25)年度には、子ども発達教育学科では2期生27名と専攻科学生3名が受験し、正規教員に16名が合格した。また、言語文化学科(日本語文化コース)の1名が、正規教員に合格している。受験地は、広島県(市)、東京都、堺市、大阪府、京都市、京都府で合格者延べ数は、26名である。

## 2 第1期生、2013(平成24)年度小学校教員採用試験受験者への調査分析

— 教員採用試験を受験するにあたり、影響を受けたと自覚している人的環境と公立学校教員採用試験合否の関係について分析 —

### 2-1 教員採用試験合否に及ぼす対人的ネットワーク

教員採用試験は受験者にとってストレスに苦しむ事態である。こうしたストレスによる心身の健康と個人の社会的環境との関係を明らかにする研究がソーシャル・サポートという枠組みで研究されてきた(浦, 1998)。ソーシャル・サポートにはストレスに苦しむ人たちに対してそのストレスを解消するために役立つ手段を提供したり、それを入手しやすくするための情報を提供する道具的サポートとストレスの状況下にある人の自尊心や情緒を癒し、励ましをあたえたりするような社会情緒的サポートがあるとされている(西川, 2000)。また、ソーシャル・サポートの実証研究が進むにつれて個人が保持する社会的ネットワークの密度やネットワークの特性が個人の心身と関係し、課題達成の成果を規定する等の知見が提供されてきた。

#### (1)相談相手

佐藤(1991)は高校生を調査対象者として悩みと相談相手との関係を明らかにしている。

その結果、「自分の性格や(異性)の友人について」は友人からの援助や助言が役立つ一方、「将来の方向」については親、兄弟、学校の教師からの援助が課題解決と強く関係していることを明らかにしている。また、坂口(1997)は大学生を対象に「自分の能力・特技」、「学習内容」などでは友人が主な相談相手であるが「就職・進路」では父母が友人と同等ないしは父母が相談相手に選ばれることを明らかにしている。

#### (2)ソーシャル・サポートと精神衛生

嶋(1992)は「家族」「同性の友人」「異性の友人」が心理的健康状態に及ぼす影響を検討し、同性友人サポートは男女とも心理的健康状態の維持に寄与すること、また、家族サポートは、女子では心理的健康状態に寄与していたが、男子では実存的ストレスに対する緩衝効果のみであることを明らかにしている。この結果に関して心理的健康状態に対するサポートの効果は女子のほうに大きな意味をもつこと、また、同性友人サポートが男女とも同じように重要であるが、家族サポートに関しては女子のほうの重要性は高く、むしろこの傾向は友人サポートを上回ると指摘している。

また福岡・橋本(1997)は、ソーシャル・サポート内容を「情緒的」「手段的」の2つに分け、家



族および友人についてのサポートの入手可能性がうつ状態を軽減する効果について検討している。男子では友人サポートのみに抑うつを軽減する効果（直接効果と緩衝効果の両方）が認められ、一方家族サポートの寄与は認められなかった。これに対し、女子では、家族及び友人がソーシャル・サポートの機能を果たしていることを明らかにしている。これらの結果、男子ではおもに友人サポートが、女子では友人サポートと家族サポート両方の有効性が示されたといえる。

### (3)精神衛生と学業成績

古澤・藤沢（2008）は大学生254名を対象に定期試験成績に及ぼす負の要因因子を明らかにするため、調査研究を行っている。その結果、精神衛生の高低と学業成績との間に強い関連があることが示された。また、精神衛生の低群では「他者に対しての優越感」という因子が抽出された。この結果について、古澤・藤沢（2008）らは「優越感は自己愛の下位尺度とされ、更に、自己愛は友人関係の広さや他者からの注目・賞賛要求といった対人関係に影響を及ぼすと考えられる」と考察している。

この古澤・藤沢（2008）らの指摘する自己愛を規定する友人関係の広さや他者からの注目・賞賛欲求はソーシャル・サポート研究でいう、対人的ネットワークの幅やソーシャル・サポートの機能に相当するものである。従って、ソーシャル・サポートの特性が当事者の精神衛生を媒介として学習意欲、学業達成度を規定することも考えられる。

## 2-2 目的

溝部・石井・財津・斉藤・古谷（2011）は公立学校教員採用試験合否を規定する諸要因を明らかにする研究を行ってきた。その結果、教員免許状取得を決めた時期、採用試験対策を開始した時期、採用試験科目への達成度の自己認知度、等の多次元の要因が1次試験、2次試験の合否を規定していることが明らかとなった。この中で、研究仮説に反し、友人達との学習会を有益だと認知している受験生ほど1次試験の不合格率が高いことが示された。この結果は従来のソーシャル・サポート研究の枠組みで明らかになった結果と矛盾するものである。そこで、本研究は対人的ネットワークに焦点をあて1次試験合格者、2次試験合格者、不合格者の対人的ネットワークの特性を明らかにすることを目的とした。

## 2-3 方法

### (1)調査対象者

主たる分析対象者は、31名（男性21名、女性10名）であった。

分析対象者の所属大学は、本学の私立大学学生が31名であった。

### (2)手続

31名を調査対象者として、質問紙調査を実施した。質問紙調査の実施は、「教職カリキュラムの実情と有効性についての調査」という題で「教員採用試験を受験した際に大学及び大学外での学習活動などがどのように影響したかについて明らかにし、大学教職課程の改善のための基礎資料とするのが目的です」との教示文を付して、留置調査法で実施した。

### (3)質問紙の構成

1. 個人属性
2. 取得予定免許状
3. 教員免許状の取得決定時期
4. 免許状取得の理由 ①教職②資格
5. 受験地（県、公立・私立）
6. 「教員採用試験」を受けるにあたり影響を与えた人間関係：影響を与えた対人的ネットワーク

8人をAさん～Hさんとし、その8人それぞれについて、5つの問いに対し、2択から8択で回答させた。①男か女かの2択 ②年齢は17歳以下、18～25歳・26～41歳・41歳以上の4択 ③間柄はどこに該当するかを8択とその他の自由記述。8択は、家族・親類・教職志望の大学同級生・教職志望外の大学同級生・教職志望の大学後輩・教職志望外の大学の後輩・大学関係教職員・趣味の仲間・その他 ④援助関係はどちらかの2択。2択は、自分が援助した・援助を受けた ⑤影響力はどこに該当するかの3択。3択は、自分の方が影響力が強い・影響力は対等・相手の方が影響力が強い。

7. 採用試験受験にあたり困ったこと：①何から勉強を始めるかがわからなかった、②何を勉強するかがわからなかった、③どのくらい勉強するかがわからなかった、④採用試験までの学習スケジュールがわからなかった、⑤採用試験勉強期間に実習等が入り日程調整に困った、⑥相談する先生がいなかった、⑦相談する仲間がいなかった、⑧採用試験の出題内容を知らなかった、⑨採用試験問題のレベルが高すぎた の項目について「1. まったく困らなかった」～「5. 非常に困った」の5件法で評定させた。

8. 平成24年度に実施された公立学校教員採用試験の結果について：①本務者試験の1次試験の結果はどうか。②本務者試験の2次試験の結果はどうか。③期限付き臨時任用試験結果はどうか。について、合格か不合格で回答させた。

2-4 結果

対人的ネットワーク

小学校教員採用試験を受験した調査対象者の対人的ネットワークの回答を基に、対人的ネットワーク上の影響を与えた人物数、人物の性、年齢、間柄、援助関係（援助提供・援助受容）、影響力の関係（影響力提供・影響力同等・影響力受容）についての生起頻度を算出し、ネットワークは1次試験と2次試験に合格した群（合・合群）、1次試験には合格したが2次試験には不合格であった群（合・不群）、1次試験に不合格であった群（不群）別に整理した。

(1)小学校採用試験の1次試験の可否とその対人的ネットワークの関係

〈表6〉教員採用試験合格・不合格別にみた対人的ネットワークの特性

1次試験合格者群																
対人的ネットワーク		対人的ネットワーク上に示された人物の特性														
ネットワーク規模	性別			年齢			間柄			援助・被援助関係			勢力			
構成数	6.9	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合
		男	52	57.1	17歳以下	0	0	家族	9	7.7	援助	4	7.4	影響力大	6	10.7
		女	39	42.8	18-25歳	70	78.7	親類	7	6.0	被援助	50	92.6	同	44	78.6
					26-40歳	8	8.9	同級生(教)	35	30.0				影響力小	24	42.9
					41歳以上	11	12.4	同級生	42	35.9						
								後輩(教)	1	0.9						
								後輩	0	0						
								大学教員	6	5.1						
								趣味仲間	16	13.7						
								その他	1	0.9						
1次試験不合格者群																
対人的ネットワーク		対人的ネットワークの構成特性														
ネットワーク規模	性別			年齢			間柄			援助・被援助関係			勢力			
構成数	5.9	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合
		男	46	46.5	17歳以下	9	9.4	家族	6	6.3	援助	11	13.3	影響力大	3	3.3
		女	53	53.5	18-25歳	65	67.7	親類	9	9.5	被援助	72	86.7	同	25	27.8
					26-40歳	5	5.2	同級生(教)	48	50.5				影響力小	62	68.9
					41歳以上	17	17.7	同級生	14	14.7						
								後輩(教)	2	2.1						
								後輩	13	13.7						
								大学教員	1	1.1						
								趣味仲間	0	0						
								その他	0	0						

各調査参加者の回答に基づき、1次試験合格群と不合格群について整理しく表6〉に示した。

- ①対人的ネットワークの規模：1次試験合格群の平均対人的ネットワーク規模は6.9であるのに対し、1次試験不合格群の平均対人的ネットワーク規模は5.9であった。
- ②性別にみた対人的ネットワーク：1次試験合格群の調査参加者の対人的ネットワークは男性(57.1%)、女性(42.8%)であるのに対し、1次試験不合格群は男性(46.5%)、女性(53.5%)から影響を受けたと回答していた。
- ③年齢別にみた対人的ネットワーク：1次試験合格群の対人的ネットワークは18歳～25歳(78.7%)、41歳以上(12.4%)、26歳～40歳(8.9%)の人物で構成されていた。1次試験不合格群の対人的ネットワークは18歳～25歳(67.7%)、41歳以上(17.7%)、26歳～40歳(5.2%)の人物で構成されていた。また、1次試験合格群の対人的ネットワークには17歳以下の人物は表れていないが、1次試験不合格群の対人的ネットワークには9.4%の17歳以下の人物が教員採用試験を受けるに当たり影響を受けた人物として表されていた。
- ④対人的ネットワーク上の人物の間柄：1次試験合格群の対人的ネットワークは教職を志望しない大学の同級生(35.9%)、教職を志望している大学の同級生(30.0%)、趣味仲間(13.7%)、家族(7.7%)、親類(6.0%)、大学教員(5.1%)で構成されていた。一方、1次試験不合格群の対人的ネットワークは教職を志望している大学の同級生(50.5%)、教職を志望しない大学の同級生(14.7%)、教職を志望しない後輩(13.7%)、親類(9.5%)、家族(6.3%)、教職を志望している後輩(2.1%)、大学教員(1.1%)で構成されていた。また、1次試験合格群で影響を受けたとされた「趣味の仲間」は、1次試験不合格群の対人的ネットワークには出現していないことが明らかとなった。
- ⑤対人的ネットワーク上の援助関係：1次試験合格群は対人的ネットワーク上の92.6%の人物から援助を受けたという影響、また7.4%の人物に援助を与えたと認知していた。一方、1次試験不合格群の調査参加者は86.7%の人物から援助を受け、また、13.3%の人物に援助を与えたとする対人的ネットワークを形成していた。
- ⑥対人的ネットワーク上の人物に対する影響力：1次試験合格群は78.6%の人物に対しては自分と相手と影響力が同等とする人物、42.9%の人物に対しては自分のほうが影響力は低いと認知する人物、10.7%の人物は自分のほうが影響力は高いと認知している人物により対人的ネットワークを構築していた。

一方、1次試験不合格群は68.9%の人物に対しては自分のほうが影響力は低いと認知する人物、27.8%の人物に対しては自分と相手との影響力が同等とする人物、3.31%の人物に対しては自分のほうが影響力は高いと認知する人物により対人的ネットワークを構築していた。

## (2)小学校教員採用試験の2次試験の合否とその対人的ネットワークの関係

1次試験に合格した調査参加者の回答に基づき、2次試験合格群と不合格群について整理したものが〈表7〉である。

- ①対人的ネットワークの規模：2次試験合格群の平均対人的ネットワーク規模は8.0であるのに対し、2次試験不合格群の平均対人的ネットワーク規模は5.8であった。
- ②性別にみた対人的ネットワーク：2次試験合格群の調査参加者の対人的ネットワークは男性(58.9%)、女性(41.1%)であるのに対し、2次試験不合格群は男性(54.3%)、女性(45.7%)から影響を受けたと回答していた。
- ③年齢別にみた対人的ネットワーク：2次試験合格群の対人的ネットワークは18歳～25歳(85.27%)、41歳以上(9.3%)、26歳～40歳(5.6%)の人物で構成されていた。2次試験不合格群の対人的ネットワークは18歳～25歳(68.6%)、41歳以上(17.1%)、26歳～40歳(14.3%)の人物で構成されていた。また、2次試験合格群、2次試験不合格群いずれの対人的ネットワークにも17歳以下の人物は表れていない。

〈表7〉教員採用試験合格・不合格別にみた対人的ネットワークの特性

2次試験合格者群																
対人的ネットワーク上に示された人物の特性																
対人的ネットワーク		性別			年齢			間柄			援助・被援助関係			勢力		
ネットワーク規模	構成数	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合
	8	男	33	58.9	17歳以下	0	0	家族	9	7.7	援助	4	8.0	影響力大	6	10.7
		女	28	41.1	18-25歳	46	85.2	親類	0	6.0	被援助	46	92.0	同	39	69.6
					26-40歳	3	5.6	同級生(教)	35	30.0				影響力小	11	19.6
					41歳以上	5	9.3	同級生	0	35.9						
								後輩(教)	0	0.9						
								後輩	0	0						
								大学教員	5	5.1						
								趣味仲間	12	13.7						
								その他	0	0.9						
2次試験不合格者群																
対人的ネットワークの構成特性																
対人的ネットワーク		性別			年齢			間柄			援助・被援助関係			勢力		
ネットワーク規模	構成数	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合	カテゴリー	頻度	割合
	5.8	男	19	54.3	17歳以下	0	0	家族	7	20.0	援助	4	11.8	影響力大	0	0
		女	16	45.7	18-25歳	24	68.6	親類	0	0	被援助	30	88.2	同	22	62.9
					26-40歳	5.0	14.3	同級生(教)	21	60.0				影響力小	13	37.1
					41歳以上	6.0	17.1	同級生	1	2.9						
								後輩(教)	0	0						
								後輩	0	0						
								大学教員	4	11.4						
								趣味仲間	1	2.9						
								その他	1	2.9						

④対人的ネットワーク上の人物の間柄：2次試験合格群の対人的ネットワークは、教職を志望しない大学の同級生（35.9%），教職を志望している大学の同級生（30.0%），趣味仲間（13.7%），家族（7.7%），親類（6.0%），大学教員（5.1%），教職を志望している後輩（0.9%）で構成されていた。一方，2次試験不合格群の対人的ネットワークは教職を志望している大学の同級生（60.5%），家族（20.0%），大学教員（11.4%），教職を志望しない大学の同級生（2.9%），趣味仲間（2.9%）で構成されていた。

⑤対人的ネットワーク上の援助関係：2次試験合格群は対人的ネットワーク上の92.0%の人物から援助を受けた，また8.0%の人物に援助を与えたと認知していた。一方，2次試験不合格群は，88.2%の人物から援助を受けた，また，11.8%の人物に援助を与えたと認知する対人的ネットワークを形成していた。

⑥対人的ネットワーク上の人物に対する影響力：2次試験合格群は69.6%の人物に対しては自分と相手と影響力が同等とする人物，19.6%の人物に対しては自分のほうが影響力は低いと認知する人物，10.7%の人物に対しては自分のほうが影響力は高いと認知している対人的ネットワークを構築していた。

一方，2次試験不合格群は62.9%の人物に対しては自分と相手との影響力が同等と認知し，37.1%の人物に対しては自分のほうが影響力は低いと認知している人物で対人的ネットワークを構築していた。

また，2次試験不合格群の対人的ネットワークには，「自分のほうが影響力は高い」と認知している人物は出現していなかった。

教員採用試験での困難認知における対人関係

本研究は教員採用試験を受けるにあたり，どのような物理的環境，社会的環境，文化的環境や事象がストレスナーとなっているかを測定した。社会的環境への困難度を測定するために『相談する先生がいなかった』，『相談する仲間がいなかった』項目で5段階尺度（5非常に困った－1まったく困らなかった）で行った。

各個人の回答値に基づき、1次試験と2次試験に合格した群（合・合群）、1次試験には合格したが2次試験には不合格であった群（合・不群）、1次試験に不合格であった群（不群）別に整理した。

(1)相談する先生：合・合群，合・不群，不群それぞれの平均値は合・合群 $M=1.8$ ，合・不群 $M=1.7$ ，不群 $M=2.4$ であり，どの群の調査参加者も教師環境には困難を感じていなかった。

(2)相談する仲間：合・合群，合・不群，不群それぞれの平均値は合・合群 $M=1.9$ ，合・不群 $M=1.7$ ，不群 $M=2.4$ であり，どの群の調査参加者も友人関係には困難を感じていなかった。

## 2-5 考察

このたびの調査は、2012(平成24)年度に、初めて教員採用試験の受験者を出した子ども発達教育学科1期生に対し、教員採用試験受験に際して影響を与えた対人的ネットワークを調査分析することで、教職指導センターの今後の教職支援の方向性や学生自身の学びの人的環境づくりについて考察することとした。

分析の結果、次の3点が考察できる。

1点目は、全体として、子ども発達教育学科1期生の対人的ネットワークの規模は小さく範囲が狭いことである。

合格群においては、不合格群よりも規模や範囲は少し大きいといえるが、合格、不合格に関係なく、全体として、規模が小さく範囲は狭い。

また、そのネットワークの間柄については、合格者群は不合格者群に対し比較的ネットワークの幅が広く、友人関係では大学の教職志望学生や大学の教職を志望しない学生、そして趣味仲間等が多い。一方不合格者群は、友人関係は大学の同級生がほとんどで、家族関係への依存度も高い。

このことから、子ども発達教育学科1期生の対人的ネットワークは、全体として、小さく範囲も狭いといえる。特に不合格者群においては、家族への依存度が高く、ほとんどの学生が自宅から通っていることからこの傾向が推察できる。

2点目は、対人的ネットワークの「影響力」において、自己評価の低さが見えることである。不合格者群は、「自分のほうが影響力が少ない」と認識している学生が合格者群に比してかなり多い結果であった。しかし、全体としては、両方の群において、「自分のほうが影響力が高い」とする学生は極めて少ない。

このことから、合格・不合格に関係なく、ほとんどの学生が自分自身の対人的ネットワークの「影響力」について低く自己評価し、対人的な自信のなさが顕著に見えてくる。

3点目は、学生の認識している「大学教員」との関係性の薄さである。

学生が認識する「大学教員」との関係性は、2次試験合格者群においても5.1%程度、1次試験不合格者においては1.1%と、極めて低い結果であった。

このことは、総じて大学教員への期待や要求が強く表に出ることは少なく、他者に対し積極的に働き掛けることの少ない学生たちであり、自分の思いだけで処理する傾向のある学生が多いことが分かるとともに、このことが教員採用試験という人生の重要な岐路においてさえ現れ、「大学教員の占める位置」が小さいことが大きな課題であるといえる。

以上のことから、子ども発達教育学科1期生においては、先輩のロールモデルもなく、小学校教員採用試験受験という初めての厳しい体験が、未知なることへの不安や自信のなさにつながっていたことは想像に難くない。同時に、人的ネットワークの小さく狭い状況にもかかわらず、「相談する仲間や先生には、困ってなかった」と認識していることから、極めて消極的な学習集団の姿が見えてくる。教職指導センターとして、多くの対策講座を設定し、多くの学習指導を実施したにもかかわらず、合格者数としての成果に結び付かなかったことは、学びの形態が、「受け身的」であった結果と

考えられる。

### 3 おわりに

このことから、今後、教員採用試験対策として大学側の重要な戦略は、次のようになろう。

1点目は、学生の学びの「仲間」作り（共同体づくり）である。

すでに多くの先行的研究で示唆されているように教員採用試験というストレスの多い状況においては、対人ネットワークの幅やソーシャル・サポートの機能に相当する「仲間」の存在が不可欠であると考えられる。

互いに悩みを打ち明け、切磋琢磨し、学習意欲を醸成する「仲間」は、精神衛生上でも、学業成績上でも、必ず必要なものであろう。

教職指導センターとしては、教職を志望する学生には、早い時期から学び合うことの重要性を認識させるべく集団作りを重視した指導形態をとるとともに、自律的に「仲間」づくりを意識し教員採用試験のプランニングを行う指導を徹底したい。また、改めて「仲間」づくりのフィールドを提供し、運営することを企画したいと考える。

2点目は、大学教員のサポート体制の強化である。

今回の質問紙調査から、大学教員がインストラクターとしての機能しか果たしていなかったのではないかと考える。大学教員はあくまでも運営管理の責任者であり、グループプロセスの観察者であり、グループプロセスの援助者であり、スケジュール管理と講義・実習のインストラクターであるという認識を改めて確認したい。

そして、今後、教職指導センターは、教員採用試験対策においても、介入と促進を行う教育スタッフとして、ファシリテーターの役割を担うことを検討したいと考える。

### 引用・参考文献

- 福岡欣治（1997）. 友人関係におけるソーシャル・サポートの入手と提供—認知レベルと実行レベルの両面からみた互惠性とその男女差について. 対人行動学研究 15, 1-12.
- 藤原正光（2004）. 教師志望動機と高校・大学生活：教員採用試験合格者の場合. 文教大学教育学部紀要 38, 75-81.
- 堀内孜・水本徳明（1986）. 教員採用に関する受験学生の意識と取り組み実態：本学学生に対する質問紙調査の結果分析を通して. 京都教育大学紀要. A, 人文・社会 69, 11-35.
- 加藤善子（2007）. ラーニング・コミュニティ・教育改善・ファカルティ・ディヴェロプメント. 大学教育研究（16）, 1-16.
- 川路澄人・佐竹易子（2011）. 学生の教員採用試験受験動向とその支援について：就職支援室におけるサポート事業を中心に. 島根大学教育学部紀要, 教育科学・人文・社会科学・自然科学 45, 1-8.
- 川路澄人・廣兼志保・高旗浩志（2004）. 教員養成学部における「教職パフォーマンス」の育成に関する一考察：「教育実地研究Ⅲ」「教職セミナー」の実践を通して. 島根大学教育臨床総合研究 3, 73-100.
- 久保順也（2012）. 初等教育教員養成課程における学生の教職意識の形成プロセスに関する縦断的研究(4). 宮城教育大学紀要 47, 295-305.
- 松原泰通・山脇健（2009）. 教員志望学生の指導のあり方(1) —教職相談室の利用の実態から—. 岡山

- 大学教育実践総合センター紀要 9(1), 51-56.
- 松原泰通・小川潔 (2010). 教職志望学生の指導のあり方(2) —教職相談室の利用の実態から—. 岡山大学教育実践総合センター紀要 10(1), 95-104.
- 松原泰通・山根文男・小川潔・江木英二・曾田佳代子・山崎光洋・笠原和彦・高旗浩志・木多功彦 (2011). 高度な専門性と実践的な指導力を有する教師の育成プログラム「教師力養成講座」の開発(2) —全学教職課程の構築に向けた教職相談室機能の拡充—. 岡山大学教師教育開発センター紀要 1, 69-76.
- 松原泰通・小川潔・山根文男・山崎光洋・高旗浩志 (2012). 高度な専門性と実践的な指導力を有する教師の育成プログラム「教師力養成講座」の開発(3) —全学教職課程の構築に向けた教職相談室機能の拡充—. 岡山大学教師教育開発センター紀要 2, 144-153.
- 松本敬子 (1998). 教員採用試験問題の分析と活用：学生の自主学習への試み. 熊本大学教育実践研究 15, 93-99.
- 三島知剛・斎藤未来・森敏昭 (2009). 教育実習生の実習前後における教科・教職専門科目に対する大学講義イメージの変容. 日本教育工学会論文誌 33(1), 93-101.
- 溝部ちづ子・石井眞治・財津伸子・斉藤正信・古谷嘉一郎 (2011). 教員採用試験の合否に影響を及ぼす諸要因に関する研究. 比治山大学現代文化学部紀要 (18), 91-100.
- 那須幸雄 (2004). わが国大学におけるキャリア教育の現状と動向：中部，関西，九州の代表的9大学に見る事例研究. 文教大学国際学部紀要, 15(1), 81-95.
- 小川潔・松原泰通 (2011). 教員志望学生の指導のあり方(3) —教職相談室の利用の実態から—. 岡山大学教師教育開発センター紀要 1, 77-84.
- 小川潔・松原泰通 (2012). 教員志望学生の指導のあり方(4) —教職相談室の利用の実態から—. 岡山大学教師教育開発センター紀要 2, 154-161.
- 小川潔・松原泰通 (2013). 教員志望学生の指導のあり方(5) —教職相談室の利用の実態から—. 岡山大学教師教育開発センター紀要 3, 162-170.
- 坂井旭 (2007). 大学教育におけるキャリア教育の現況報告—職業観・勤労観育成の現場から. 愛知江南短期大学 紀要 (36), 33-46.
- 坂口りつ子 (1997). 学生の間人間関係についての一考察—悩み・関心事とその相談相手. 西南学院大学児童教育学論集 23(2), 43-55.
- 佐藤有耕・山本誠一・加藤隆勝 (1991). 高校生の悩みと求める援助の特質. 筑波大学心理学研究 13, 141-154.
- 鮫島麻由・佐藤史人 (2007). 和歌山大学教育学部におけるキャリアカウンセリングの特徴. 和歌山大学教育学部紀要 教育科学 58, 117-125.
- 嶋信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果. 社会心理学研究 7(1), 45-53.
- 駿河克宏・佐藤史人・松浦善満 (2010). 和歌山大学教職・キャリア支援室の活動状況と教員採用試験の合否状況について. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 20, 23-29.
- 鷹岡亮・沖林洋平・霜川正幸・田中理絵・源田智子・久保田尚・岡村吉永 (2012). 学生の自発的研修活動に関する基礎的調査(2). 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 33, 69-76.
- 高木修 (2000). シリーズ21世紀の社会心理学 4 援助とサポートの社会心理学 助けあう人間のこころと行動. 北大路書房.
- 東海大学教務部課程資格教育指導室 (1992). 学生の教員採用試験受験に関する調査報告. 東海大学紀要 課程資格教育センター 1, 46-50.

浦光博 (1998). ソーシャル・サポートの理論的モデル. 人を支える心の科学. 誠信書房.

若松養亮 (2012). 教員養成学部生における教職志望の変動要因. 滋賀大学教育学部紀要 (教育科学), 87-97.

吉澤隆志・藤沢しげ子 (2008). 定期試験成績に負の影響を及ぼす因子の検討. 理学療法科学 23(6), 731-736.

#### キーワード

教員採用試験・教職志望学生・人的環境・対人的ネットワーク・教職指導センター

溝部ちづ子 (言語文化学科日本語文化コース)

石井 眞治 (子ども発達教育学科)

財津 伸子 (教職指導センター・学習サポートセンター)

齊藤 正信 (教職指導センター・学習サポートセンター)

古谷嘉一郎 (北海学園大学経営学部経営情報学科)

(2013. 10. 30 受理)